



Title	高校生の就業意識と自己意識：時間的展望の異なる二つの類型について
Author(s)	浅川, 和幸
Citation	北海道大学大学院教育学研究院紀要, 105, 1-28
Issue Date	2008-06-27
DOI	https://doi.org/10.14943/b.edu.105.1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33933
Type	departmental bulletin paper
File Information	105_p1-28.pdf



高校生の就業意識と自己意識

— 時間的展望の異なる二つの類型について —

浅 川 和 幸*

The Relation between Self-Consciousness and Occupational Consciousness in the case of High School Students

Kazuyuki ASAKAWA

【要旨】現在の若者問題において、就業意識と自己意識の分析がバラバラに行われている状況に対する批判的な問題意識から、札幌市の高校3年生の就業意識と自己意識との関係を分析した。自己意識の因子分析からは、単一の自己アイデンティティを重視する一元型だけでなく、いわゆる「状況依存的自己」を指し示す二つの型が抽出された。就業意識の因子分析からは、従来のな、労働のなかで自己の発達を期す型も抽出されたが、第一因子は「将来展望」をもたず「マイペース」を重視するものであった。自己意識の＜状況依存／一元＞は、将来目標の＜不明／明＞を經由して、就業意識の時間的な秩序化の在り方と関わっていた。すなわち、一元型と労働のなかで自己の発達を期す型が結びついた＜発達型＞と、「状況依存的自己」と「将来展望」をもたず「マイペース」を重視する型が結びついた＜非発達型＞の二つが見出された。この＜非発達型＞は、未来を起点に今に関わるという労働主体的な発想をもたず、消費主体的な発想になっていた。さらに社会意識・将来意識において、＜非発達型＞は非常に悲観的で、不幸せ感を強くもっていた。このように、就業意識と自己意識の関係を分析することから、「時間的展望」の違いという新たな視角の重要性が示唆された。

【キーワード】就業意識、自己意識、時間的展望

1. なぜ高校生の就業意識分析に自己意識分析を組み込むのか

本稿では、高校生3年生の自己意識分析と就業意識の分析を行い、時間的展望の異なる二つの類型を明らかにする。

このような方法をとるのは、近年の若者をめぐる議論・分析の示唆を活かしながらも、それぞれの断片化された理解を関係づけることで、新しい分析の地平を手に入れるためである。

まず、就業意識研究の到達点を、具体的には進路指導における研究において確認し、それがより大きな若者をめぐる議論や分析と、どこが重なり、どこがずれているのかを確認しておきたい。

進路指導に関するある研究は、1990年代以降、従来の進路トラックが質的变化を遂げていることを報告している。特に生徒の保護者の階層的格差が「トラックの再編成」をもたらし

* 北海道大学大学院教育学研究院教育社会発展論分野准教授

ていると指摘している¹。これは時代的な背景として重要な指摘となっている。

ところで進路指導の原則として、「在り方生き方」の進路指導が現在行われている。2004年以降は、これにキャリア教育が加えられるようになった。「在り方生き方」の進路指導とは、1990年代以前の進路トラック（経路）が健在であった時代の、いわゆる「出口指導」を批判する中で生まれた。生徒の「進路選択の自由」を尊重する立場から、生徒の進路意識、生徒の「在り方」や「生き方」に注目する。さらにキャリア教育が導入されてからの進路指導は、フリーターやニートの発生を予防する観点から、生徒の「就業観や勤労観」を教育することを課題としている。

すなわち、新自由主義による教育改革の進路指導版が「在り方生き方」の進路指導であり、生徒の内面の教育を目指している。これは先に指摘した「進路トラックの再編成」から生じる問題を、教育によって解決することを企図したものである。そして若年雇用が困難になるにいたって「進路選択の自由」は多少後景に退き、より強力な指導のためのキャリア教育が前景に現れている。

このような「在り方生き方」の進路指導への批判的検討は、部分的だが行われている。従来の進路トラックのもっていた機能が変化することに対応して、「在り方生き方」の進路指導が行われているという理解を背景に、望月由起は「在り方生き方」指導の進学アスピレーションを高める効果が、従来の進路トラックにおいて行われていた「進学指導」の、生徒をクールダウンする力を奪っているとの指摘をしている²。また片瀬一男も、「在り方生き方」の進路指導を直接の批判対象とはしていないが、生徒のなかに広がる「アスピレーション・アノミー」を主張している³。

他方でキャリア教育への実証的な批判は、まだ本格的にはなされていない。ここまでのところ、進路多様校の高校生とフリーターの意識の共通性を分析した研究等のキャリア教育推進の根拠となるような研究が行われてきたと言える⁴。

総じて、研究はまだ充分ではないわけではあるが、時期を無視してまとめるなら、進学をめぐる「過剰なアスピレーション」と就職をめぐる「就業観や勤労観の衰え」が問題とされたと言える。特に、生徒の内面に注目することやそれを教育することが課題となっている。そして、研究や政策の目的に強く規定された形で、生徒の内面を切り取っている。

また、このような断片的な把握から、高校生像を構築する在り方は、現代の若者問題の作られ方とも共通している。

さらに、若者問題も視野に入れて考えてみよう。

戦後の日本において、「若者」という世代は、常に問題にされ続けてきたとも言える。しかし昔の取り上げられ方と、現在に特徴的な取り上げられ方とは異なっている。一言で言えば、現在の取り上げられ方は否定一辺倒になっている⁵。

そして現在の「若者」世代の取り上げられ方は、主に二つの領域の、個別的な議論からなっていると言える。古い順に紹介しよう。

ひとつは1980年代の「オタク」の議論を端緒としたものだ。特に1990年代の後半に神戸児童連続殺傷事件をきっかけとして盛り上がったもので、若者の内面や自己の在り方に注目している。そして現在も、少年法の見直しと関連して議論されている。一言で言えば、「恐ろしいもの」としての若者像であり、その「恐ろしさ」は若者の内面にある。最近のもので言えば、例として『新エゴイズムの若者たち』⁶や『他人を見下す若者たち』⁷があがる。

もうひとつは、2000年前後から、経済の新自由主義化のもとで若者の困難化する就労や生活が、「フリーター」として注目された。その後も「ニート」として議論が続けられている。一言で言えば、「ふがないもの」としての若者像であり、「そのふがないさ」は、端的には就労できないことにある。この問題について詳しい説明は不要だと思うので例をあげることはしないが、若者の雇用状況が厳しくなるなかで、その原因を若者の勤労意欲の欠如や考えの甘さに求める議論がほとんどである。前者の「恐ろしいもの」としての若者とは、部分的に重なっている。そして政府は若者を「鍛え直す」ために、「キャリア教育」や「若者自立塾」などの政策を具体化している。

先に紹介した進路指導研究の問題意識と若者問題との重なりは、大雑把に言うと、自己意識と就業意識への注目という点では類似している。特に、後者の就業意識（その「弛緩」）への注視と教育によってそれを矯正しようとする問題意識は、全く重なっている。しかし、前者の自己意識を問題とする仕方はかなり異なっている。進路指導研究で問題とされているのは、進路トラックの再編が進行している中で、「在り方生き方」の進路指導が、「過剰なアスピレーション」を起こしているというもので、内面の分析としては実質に乏しい。

そして何よりも、進路指導研究では、若者問題における自己意識の研究で実証的な分析の成果があがっている、「自己の多元化」や「状況依存的自己」というような、全体的な人間類型の変化に関する問題意識が見られない。高校生の自己意識は、従来よりも「未成熟」になったとする議論や、先に紹介したような進学層の「アスピレーション・アノミー」等の指摘に止まっている。前者の＜成熟／未成熟＞という評価基準は、外在的な評価基準による自己意識の判別に止まる。後者の「アスピレーション・アノミー」も同様で、結局のところ＜分相応／分不相応＞という、これもまた外在的な評価基準に止まる。これらの評価基準は、社会を、あるいは社会的要請を固定的なものとして仮想し、順調に「社会化」しているのかどうかを評価するという意味に限定されている。

さらに方法的には、対象とした部分的な層の評価を全体的な評価に直結させ、自己意識と就業意識との連関を、共に全く議論していない。

これらのことを考慮して、本稿では研究方針を以下のようにした。

第一に、若者問題と高校生の進路意識問題を統一的に把握する枠組みを採用する。具体的には、現在の若者問題の批判の図式を、変更し、分析の視点とする。すなわち、若者問題で行われている、自己意識と就業意識を切り離して捉えそれぞれで批判するやり方を、その相互関係を分析するという方法に変更する。第二に、再帰的近代化が進む状況⁸で進行している自己意識の在り方の大きな変化をつかむことを、自己意識の分析の方法にする。進路指導研究が採用した従来のトラックシステムからのずれの把握という消極的な方法ではなく、新しく生まれつつある質をつかみたい。これらの問題意識から、高校生の自己意識分析を基底において就業意識分析を行う。

さらに、若者問題で用いられる若者批判の方法を高校生分析の視点とするという、ここでのアプローチについて少し説明を付け加えておきたい。

高校生という、少し若い「若者」たちを対象としたという点で、ここでの分析は限定されていると言えるだろうか、という点についてである。

本稿の立場からは、その限界は決定的ではないと考える。本稿が、高校生を若者分析の一事例として考えてもよいと判断する根拠は少なくとも3点ある。

第一に、高校生も文化的には消費文化の影響力を強く受けていることがあげられる。消費文化のなかでは一人前（以上）の主体である。

第二に、学生という身分の規定性は、弱まっていると考えられる。一部の進学校は例外だと言えるかもしれないが、従来の進路のトラックは、1990年代の中盤以降に制度疲労を始めている。山田昌弘が『希望格差社会』⁹で書いているように、「ニューエコノミー」のもとでトラックの「パイプライン」は「機能不全」に陥っている。例えば就職においても、1990年代中盤からの学卒労働市場の大きな変化は、学校紹介システムの役割を大きく低下させた。また学校現場の声としても、学生の中のアルバイト経験は広く深くなり、「パートタイム学生」という言葉が日常語となっている。

また進学の場合でも、大学の全入状況と進学の家計依存性の高まりは、生徒の競争的な学習動機を弱めている。一部の学校を例外として、生徒を勉強に駆り立てる力を学校はもっていない。

第三に、高校生は、学校でも家でも「自己決定」するように迫られている。「ゆとり教育」は、学力よりも、生徒自身の「興味や意欲」を重視することに、学習指導の力点を移動させた。学校の生徒に対する関わり方も、「指導」から、生徒への「支援」にシフトした。進路決定における主導権は、本人（高校生）にある。

これらの状況の変化は、若者が高校卒業以前であっても、現在の社会・文化的な圧力に強くさらされざるを得ないことを示している。「学生」という身分の特殊性を考慮する必要はない、とまでは言わないが少なくなっている。

逆に、高校生を対象とするメリットをあげておこう。何よりも検討可能なケース数が多いことである。アンケート調査で入手可能となったのは、北海道の、道都札幌と地方中核都市釧路の3400名を超える事例である。この量は学校という特定の場で補足可能な高校生であるから確保できたと言える。若者への批判が、一部の若者に特徴的なことを、過度に一般化するのが特徴的な手法であったから、このやり方への批判という意味も込められている。

本稿では、札幌地区の高校3年生にフォーカスして考察を進めたい。釧路地区の高校生は比較にとどめておく。約2400名が対象者となるが、この結果は対象校の選定の在り方とも関係するが、統計的にみて札幌市の高校3年生の平均的な姿を代表している。

なおこの調査は、文部科学省科学研究費助成金（「発達・学習支援ネットワークのデザインに関する総合的研究」代表：鈴木敏正）によって行った。また、調査時期は9～10月になっているので、就職では内定が出始めた時期にあたる。

2. 調査の概要と対象とした高校の階層的特徴

まず、対象とした高校とその特徴を概観する。図表1がそれを見たもので、生徒の進路希望を比較したものだ。学科と高校入試の難易度の違いによって、高校を四つの階層、進学校、中堅校、進路多様校、専門高校に区別して表した。

分析は札幌地区を中心とすると先に述べたが、ここでは北海道の地域的な格差を強調するために、釧路も部分的に掲げた。ただし釧路地区は、調査設計上の問題から、進学校が欠けている。

図表 1 学校×進路希望

(札幌地区)

	高校名	学科	学生数 (名)	就 職 (%)	専門・ 各種学 校進学 (%)	短大進 学(%)	四年制 大学進 学(%)	右記合 計(%)				
									フリー ター(%)	迷って いた(%)	考えて いな かった (%)	その他 (%)
進学校	a	普通科	287	3.2	6.4	6.0	80.9	3.5	0.0	2.1	0.7	0.7
	b	普通科	297	1.4	4.4	0.7	91.5	2.0	1.0	0.7	0.0	0.3
中堅校	c	普通科	318	6.7	28.3	9.6	51.9	3.5	1.6	1.3	0.0	0.6
	d	普通科	264	8.8	32.6	7.7	43.3	7.7	0.4	6.1	0.4	0.8
進路多 様校	e	普通科	267	14.2	39.8	5.7	28.4	11.9	3.8	5.7	0.4	1.9
	f	普通科	198	35.2	32.6	3.6	14.5	14.0	5.2	5.7	1.6	1.6
専門高 校	g	専門学科	254	53.4	26.5	3.6	15.7	0.8	0.8	0.0	0.0	0.0
	h	専門学科	252	57.8	22.3	4.0	13.9	2.0	0.8	0.4	0.0	0.8
	i	専門学科	305	39.4	36.8	4.3	12.9	6.6	2.3	2.3	0.0	2.0
合計・平均			2442	23.2	25.1	5.1	41.0	5.5	1.7	2.6	0.3	1.0

(釧路地区)

	高校名	学科	学生数 (名)	就 職 (%)	専門・ 各種学 校進学 (%)	短大進 学(%)	四年制 大学進 学(%)	右記合 計(%)				
									フリー ター(%)	迷って いた(%)	考えて いな かった (%)	その他 (%)
中堅校	a	普通科	242	26.3	32.9	12.1	26.3	2.5	1.3	0.8	0.0	0.4
	b	普通科	148	29.6	38.0	9.9	18.3	4.2	1.4	2.1	0.0	0.7
進路多 様校	c	普通科	188	46.5	34.6	4.9	9.2	4.9	2.2	0.5	0.5	1.6
	d	専門学科併置	108	61.3	17.9	7.5	3.8	9.4	0.9	1.9	1.9	4.7
専門高 校	e	専門学科	218	65.6	15.8	1.9	12.1	4.7	1.4	0.5	0.9	1.9
	f	専門学科	151	58.0	25.3	5.3	4.7	6.7	3.3	1.3	0.7	1.3
合計・平均			1055	46.6	27.7	6.9	13.8	4.9	1.7	1.1	0.6	1.5

図表 1 に明らかなように学校の階層によって進路希望は大きく異なる。まず、札幌地区をみてみよう。

就職希望は、進学校で数%（ほとんど公務員志望）、中堅校で 10 % 未満、進路多様校で 10 ~ 30 %、専門高校¹⁰で 40 ~ 50 % となっている。ただし、進路多様校は学校による違いが大きく、専門高校（昔の職業高校）は学科の違いが大きい。

同じように四年制大学進学希望をみると進学校が 80 ~ 90 %、中堅校で 40 ~ 50 %、進路多様校で 10 ~ 30 % 弱、専門高校で 10 % の前半である。ここには著しい差がある。また平均で 40 % 程度と、札幌地区で全国平均の四年制大学進学にやっと並ぶ。

次に専門学校進学を検討する。北海道は、専門学校進学の進路に占める比重が高いが、札幌でもその通りであることがわかる。進学校で一桁%、中堅校で 30 % 前後、進路多様校で 30 ~ 40 %、専門高校は少し減って 20 ~ 30 % となっている。進学校を除き、30 % 程度となっている。進路希望に占める割合は大きい。

右記合計では、進路多様校で多いことがわかる。まだ進路希望の段階なので、それほど高くなっているわけではない。

札幌の話はひとまずおいて、釧路地区との違いをみる。地域差がかなり大きいことがわかる。同じ学校階層であっても、進路実態は大きく異なっている。

例えば、釧路地方は北海道の中にあって函館や旭川に次ぐ中核都市であるが、中堅校と比較して、四年制大学進学希望が20%程度も低い。

このように進学における地域差は、北海道において顕著である。また高等教育機関も札幌に集中している。そのため、札幌以外の地域からの高等教育進学は、下宿などの生活費の家庭負担を重くし、その結果、このような進路の地域差の問題が顕著に現れることになる。

ところで、ここでは進路希望を取り上げたが、進路結果と異なる点は、進学や就職ができなかったものが、進学の場合は浪人を主に右記の進路に、就職の場合は右記の進路になると考えられる。

3. 生徒の自己意識の特徴とその規定要因

以下で分析を行っていく。繰り返しになるが、分析の焦点は自己意識と就業意識をそれぞれ分析し、その相互関係を検討するというものである。ここでは、まず自己意識について分析を行う。

(1) 勉強しない高校生

図表2 学校区分×勉強時間（札幌地区）

			勉強時間					合計
			ほとんど毎日する	週に半分 以上はする	週に半分 くらいしかない	週に1日く らいしかない	家では、 ほとんど勉強しな	
学校区分	進学校	度数	149	108	129	53	145	584
		学校区分の%	25.5	18.5	22.1	9.1	24.8	100.0
		調整済み残差	16.1	12.4	11.3	-0.1	-23.3	
	中堅校	度数	38	37	55	63	386	579
		学校区分の%	6.6	6.4	9.5	10.9	66.7	100.0
		調整済み残差	-2.3	-0.7	-0.4	1.6	1	
	進路多様校	度数	20	16	22	38	368	464
		学校区分の%	4.3	3.4	4.7	8.2	79.3	100.0
		調整済み残差	-3.9	-3.4	-4.1	-0.8	7.2	
	専門高校	度数	11	11	35	70	681	808
		学校区分の%	1.4	1.4	4.3	8.7	84.3	100.0
		調整済み残差	-9.2	-7.7	-6.5	-0.6	14.1	
合計		度数	218	172	241	224	1580	2435
		学校区分の%	9.0	7.1	9.9	9.2	64.9	100.0

($\chi^2=734.47$, $df=12$, $p<0.000$)

分析の本筋から少し離れるように思うかもしれないが、わかったことの中で非常にびっくりしたことを紹介しておこう。それは、勉強時間が全体的に、非常に少ないことである。このことは内田樹も『下流志向 学ばない子どもたち働かない若者たち』で言及していた¹¹。

そこでの議論の核心部分は、子どもや若者が怠けているのではなく、消費社会において主体化した者としての行動原理に忠実であることが、「学ばない」ことや「働かない」ことに

つながっているということである。

図表2でわかるように、「毎日勉強する」高校生は、進学校の生徒でも25.5%と四分の一にすぎない。全体ではたった9.0%となる。「家では全く勉強しない」高校生は、64.9%と三分の二に迫る。さらに自己評価との関連も触れておくと、成績が「上の方」と自認している生徒でも、57.7%は家では全く勉強しない。

なぜ勉強しないのだろうか。本稿ではこの点について、内田の説明とは異なる方法で、時間意識との関係から考えてみたい。

本筋に戻って、自己意識の問題を取り上げる。

(2) 高校生の自己意識——因子分析の結果から

若者研究において自己意識を検討することは、中心的な役割を果たしている。そこでは、自己意識のポスト・モダンともいえる議論の影響が強い。いわゆる「多元的自己」論である。この議論の代表とも言える浅野智彦は、要約すると次のような主張をする¹²⁾。

第一に、現代の若者は、複数の自己をもっている、あるいは使い分けていることである。第二に、そのどれもが否定的な自己評価とつながらない。

このことは確認できるのだろうか。

まず自己意識を、ここでは自分をどのように意識しているかと捉える。このことを明らかにするために、浅野とその共同研究者が行った調査の設問を参考にして、図表3にあるような質問を行った。それぞれの質問について、「あてはまらない」から、「あまりあてはまらない」、「ややあてはまる」そして「あてはまる」を選んでもらった。4点尺度である。さらに、それぞれを1～4点の点数として考える。この点数の平均をより支持されている方から、地区別に、並べてみた。釧路地区は札幌地区の順位を基準に整列し順位をつけた。

図表3 自己意識をたずねた項目の平均点と順位

	札幌地区		釧路地区	
	平均値	順位	平均値	順位
エ. 自分には、自分らしさがあると思う	2.97	1	3.03	1
コ. 本当の自分は一つとは限らない	2.95	2	2.87	2
セ. 自分には個性がある	2.84	3	2.84	3
オ. 自分がどんな人間か、はっきりわからない	2.74	4	2.71	4
シ. 話す相手によって、本当の自分と偽の自分を使い分けている	2.66	5	2.59	10
ウ. 自分の感情を素直に出す方が多いほうだ	2.66	6	2.71	5
カ. 本当の自分は、まだ自分の中に隠れていると思う	2.65	7	2.67	7
ケ. 環境が変われば、今の私らしさも変わってしまう	2.64	8	2.55	11
イ. 自分は人に甘えることが多いほうだ	2.60	9	2.64	8
ス. 話す相手によって、性格がことなる	2.59	10	2.52	13
キ. どんな場面でも自分らしさを貫くことを大事にしている	2.59	11	2.70	6
ク. どこかに今の自分とは違う本当の自分というものがある	2.58	12	2.63	9
サ. 新しい性格になりたい	2.46	13	2.53	12
タ. 人付き合いが苦手だ	2.39	14	2.37	14
ア. 一人でいると不安になる	2.26	15	2.37	15
ソ. 個性を出すことはしない方がいい	1.97	16	1.96	16

図表3から概観できるように、両地区とも、「エ．自分には、自分らしさがあると思う」や「セ．自分には個性がある」が支持されている（得点が高い）。しかし得点が高いといっても3点前後であり、2.5点が平均点であることを考えると、絶対的な支持を得ているわけではない。しかし、それと一見矛盾する「コ．本当の自分は一つとは限らない」や「オ．自分がどんな人間か、はっきりわからない」も相対的に高得点をとっている。この結果は、自己意識が錯綜した構造にあることを予感させる。

そして、「シ．話す相手によって、本当の自分と偽の自分を使い分けている」の順位が札幌地区で高いように、地区によっての違いも見受けられる。

この「錯綜」を解明するために、因子分析という方法を使って、自己意識を規定するいくつかの要因（因子）を調べてみた。因子分析とは、この設問への高校生の答え方に潜む、共通の要因（共通因子）を探り出す統計手法のことである。

釧路地区と札幌地区で同じ因子が抽出された。そのため、ここでは図表4にそって釧路地区の結果を省略し説明する。

図表4 自己意識の因子分析（主因子法、プロマックス回転）

(札幌地区)				
	因子			
	I 自己確信因子	II 自己未決因子	III 自己使い分け因子	IV 他者依存因子
エ．自分には、自分らしさがあると思う	0.82	-0.03	0.01	0.02
セ．自分には個性がある	0.74	0.03	0.09	-0.06
キ．どんな場面でも自分らしさを貫くことを大切にしている	0.56	0.12	-0.13	0.00
カ．本当の自分は、まだ自分の中に隠れていると思う	0.01	0.79	-0.06	-0.02
ク．どこかに今の自分とは違う本当の自分というものがある	0.10	0.76	0.01	-0.03
コ．本当の自分は一つとは限らない	0.12	0.46	0.21	0.00
オ．自分がどんな人間か、はっきりわからない	-0.31	0.42	-0.04	0.16
ス．話す相手によって、性格がことなる	-0.03	0.00	0.83	0.06
シ．話す相手によって、本当の自分と偽の自分を使い分けている	-0.01	0.03	0.82	-0.02
イ．自分は人に甘えることが多いほうだ	0.00	-0.05	0.04	0.76
ア．一人でいると不安になる	-0.07	0.08	0.02	0.48
ウ．自分の感情を素直に出す方が多いほうだ	0.34	-0.04	-0.09	0.38
因子間相関係数				
	I	II	III	IV
I	—	-.12	-.18	.08
II		—	.42	.15
III			—	.06
IV				—

まず、この図表の読み方について簡単にふれておきたい。

同じ列の太字の数字（因子負荷量）に対応した項目を、全体として一つの因子と考える。例えば第一因子は、「エ．自分には、自分らしさがあると思う」、「セ．自分には個性がある」、「キ．どんな場面でも自分らしさを貫くことを大切にしている」からなる。この三者を貫く論理という観点から、この因子に、「自己確信因子」と名づけてみた。この因子は、「自分には、自分らしさや個性があり、それを貫くことが大切だ」とする内容をもっている。私たちが前提（あるいは教育の目標）とするような高校生の在り方と言って良いかもしれない。

ハードな自己と捉えることもできる。

同様に第二因子が、「カ．本当の自分は、まだ自分の中に隠れていると思う」、「ク．どこかに今の自分とは違う本当の自分というものがある」、「コ．本当の自分は一とは限らない」、「オ．自分がどんな人間か、はっきりわからない」からなる「自己未決因子」である。これは「本当の自己が仮の自己（今の自分）のなかに隠れている、あるいは複数ある」と考える在り方である。「未決」と名づけた意味は、「本当の自分を決定しないようにする」というニュアンスをそこに込めたかったからである。

第三因子は、「ス．話す相手によって、性格がことなる」、「シ．話す相手によって、本当の自分と偽の自分を使い分けている」からなる「自己使い分け因子」で、「相手に応じて自己を使い分ける」と考える在り方である。

そして第四因子は、「イ．自分は人に甘えることが多いほうだ」、「ア．一人でいると不安になる」からなる「他者依存因子」で、相手に依存することで自己を保つ在り方である。「ウ．自分の感情を素直に出す方が多いほうだ」は、因子負荷量が0.4未満であるので、統計処理の標準的な手順により、無視する。このように「他者に依存する」という逆説的な自己意識も存在している。これは次項の分析で明らかになるが、女性であることが関わっている。

さらに図表4の下部にある因子間相関係数から、因子ごとの関係を検討する。すぐに、「自己未決因子」と「自己使い分け因子」の相関はとても強いことがわかる(0.42)。この点でも釧路地区は同様であった。

このことは、自己を決定しない状態におき（「自己未決因子」）、そのことで他者への選択的な関わりを可能にする（「自己使い分け因子」）という関係を示唆する。少なくともこの二つの因子は近い関係にある。「自己確信因子」との対比からは、ソフトな自己と言えるかもしれない。

浅野の言う「自己の多元化」が、二つの因子（「自己未決因子」と「自己使い分け因子」）として示唆される結果となった。「自己確信因子」のような自己観と、「自己未決因子」と「自己使い分け因子」のような自己観が並列して存在し、そしてこの二つの自己観は対立する関係にある。このことから、進路指導で念頭に置く自己（選択する主体）とその発達的な在り方（未熟から成熟へ向かう在り方）をそのまま前提とすることができないことがわかる。

「自己確信因子」と「自己未決因子」の因子間相関係数の値はあまり大きくないが、マイナスになっている（ -0.12 ）。「自己確信因子」と「自己使い分け因子」の因子相関係数もマイナスである（ -0.18 ）。札幌地区と釧路地区の自己意識の構造は酷似しているわけだが、この点が少し異なっている。釧路地区では前者の因子相関係数が0.00、後者のそれが -0.10 であった。すなわち、札幌地区の「自己確信因子」と「自己未決因子」そして「自己使い分け因子」は、対立する関係にある。

後者の二つの因子のより詳細な特徴の説明は6節に譲るとして、このそれぞれがどのような要因に規定されているかを、重回帰分析という手法で確かめておく。

(3) 自己意識の規定要因

図表5 自己意識因子の規定要因（重回帰分析）

(札幌地区)

		自己確信因子		自己未決因子		自己使い分け因子		他者依存因子	
		標準偏 回帰係	有意 確率	標準偏 回帰係	有意 確率	標準偏 回帰係	有意 確率	標準偏 回帰係	有意 確率
学校	進学校ダミー	-0.044		0.057 *		-0.003		-0.031	
	進路多様校ダミー	-0.003		0.048 *		-0.015		-0.027	
性別	男性ダミー	0.058 **		-0.017		-0.082 ***		-0.196 ***	
	就職ダミー	-0.020		-0.109 **		-0.020		-0.066 *	
進路希望	専門学校・各種学校進学ダミー	-0.037		-0.091 **		-0.007		-0.034	
	四年制大学進学ダミー	-0.026		-0.120 **		0.011		-0.061	
保護者職業	ホワイトカラー上層ダミー	0.018		0.019		-0.016		-0.009	
	ブルーカラーダミー	-0.018		0.016		-0.039		-0.054 *	
学校生活	「学校生活に充実感あり」ダミー	0.141 ***		-0.045 *		-0.109 ***		0.063 **	
目標不明	「やりたいものが見つからない」ダミー	-0.211 ***		0.152 ***		0.099 ***		0.051	
親子関係	「親子でお互いに話をする機会が多い」ダミー	0.067 ***		-0.044 *		-0.048 *		0.051 *	
友人	友人数(20人以上いるか)ダミー	0.139 ***		-0.038		-0.087 ***		0.075 ***	
	N(ケース数)	2361		2361		2361		2361	
調整済みR ² 乗値		0.105		0.039		0.041		0.063	
F値		22.953		8.557		8.995		13.677	
有意確率		0.000		0.000		0.000		0.000	

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

※ ダミーとはダミー変数のこと。進学校ダミーの場合、進学校であれば1をそうでなければ0を用いている。もともと変数でないものを変数として扱うときに用いる統計的な手法である。

重回帰分析は、検討の対象となるもの、ここでは各因子に、表側にある各項目の変数があるのに関わっているかを、他の項目から受ける影響を取り除いた形で、分析する手法である。

ここでは分析のために、生徒の属性に関する4項目と生徒の就学や生活への評価に関する4項目を用意した。前者は、「学校」（進学校か否か、あるいは進路多様校か否か）、「性別」（男性か否か）、「進路希望」（就職か否か、専門学校・各種学校進学か否か、そして四年制大学進学か否か）、そして「保護者の職業」（ホワイトカラー上層か否か、あるいはブルーカラーか否か）である。後者は、「学校生活」（学校生活に充実感があるか否か）、「目標不明かどうか」（「やりたいものが見つからない」か、否か）、「親子関係」（「親子でお互いに話をする機会が多い」か、否か）、そして「友人数」（20人以上いるか否か）である。重回帰分析では、このそれぞれをダミー変数として分析した。

注目するのは、表中の数字とその横にある*（アスタリスク）、すなわち標準偏回帰係数とその有意確率で、アスタリスクのついた数字の大きいものが強く因子に影響していることを表している。また、調整済みR²乗値は、この項目全体でどの程度説明できるのかを表している。「自己未決因子」と「自己使い分け因子」は、このR²乗値が小さい。そのため、「自己確信因子」と「他者依存因子」に比べて、これらの項目群の説明力は低い。

それぞれの因子に影響している項目を、影響力の強い有意確率の1%水準（**）と0.1%水準（***）を確認しながら説明する。

第一に、「自己確信因子」についてみておく。「男性」であると「自己確信因子」は強まる。すなわち、性別が関わる。同じように、「学校生活に充実感がある」、「親子でお互いに話をする機会が多い」、「友人数が多い」と「自己確信因子」は強まる。逆に、「目標不明」の場合は、「自己確信因子」は弱まる。

第二に、「自己未決因子」である。「自己未決因子」を強める要因は、「目標不明」である。弱める要因は、進路が「就職希望」、「専門学校・各種学校進学希望」、「四年制大学進学希望」、である。

第三に、「自己使い分け因子」である。これを強める要因は、「目標不明」のみである。弱める要因は、「男性」であること、「学校に充実感あり」、「友人数が多い」である。

第四に、「他者依存因子」である。これを強める要因は、「学校に充実感あり」と「友人数が多い」である。弱める要因は、「男性」であることである。

全体を通して言えるのは、学校、進路、保護者の職業の影響力は部分的で限られることである。属性に関する項目群で性別は例外的に影響力が強い。それに比べて、学校生活への評価（「学校に充実感あり」）、「目標不明」かどうか、友人が多いのかどうかの影響力は強い。

特に、「目標不明」（「やりたいものが見つからない」）の効果は三つの因子に共通し、かつ強い。この点は特に注意しておく必要がある。自己の＜多元／一元＞が、目標の＜不明／明＞と強く関わっている。さらに目標とは、未来という時間から現在を把握することでもある。すなわち、自己意識の＜多元／一元＞は、時間意識の在り方に強くかわる。

このように考えておくなら、目標とは、高校生が混沌とした彼ら／彼女らの自己意識の中に、目標（未来）を起点とした時間的秩序を構築するためのアンカーとなっている可能性がある。だからこれが存在する場合と存在しない場合で、自己意識の在り方が変わってくる。

そして、もうひとつ注意しておきたいのは、「自己未決因子」と「自己使い分け因子」における「目標不明」ニュアンスである。「目標不明」は、「やりたいものが見つからない」であるが、「自己未決因子」意味するところを積極的に理解するなら、「やりたいことを見つけない」というニュアンスが含まれているのではないだろうか。この場合、「目標を定めることのリスクを負わない／負いたくない」という意味になるかもしれない。

このことを重視するのは、＜目標が定まる／定まっていない＞を、＜成熟／未成熟＞と断じることができないと考えているからである。

さらに各因子に影響力をもった項目群の違いは、生徒が自分にとって手の届く、あるいは手応えのあるものとの関係で自己意識を育んでいることを表しているとも考えられる。

例えば、学校階層によってではなく、「学校に充実感あり」が問題である。進路希望と「目標不明」の関係や、親の職業と「親子でお互いに話をする機会が多い」の関係でも同様である。先行研究では、学校トラックの影響力が低下し、経済的階層の差が重要になっていることが示唆されていた。ここでは前者は同意できるが、後者は職業階層として考察したためか、明らかにならなかった。

4. 生徒の就業意識の特徴と規定要因

ここでは、自己意識を規定する因子を導き出したのと同じ方法をとって、生徒の就業意識の特徴を明らかにする。用いた項目は、下村英雄がフリーターとその予備軍（高校生）に共通する要素を探す研究で使われたものである¹³。

（1）生徒の就業意識

図表6にあるような、就業に関するア～コの10の質問ごとに、「そう思わない」、「どちらかといえばそう思わない」、「どちらかといえばそう思う」そして「そう思う」（1～4点の点数をつけてある）を選んでもらった。点数の高い、支持された順に並べてある。設問項目のあとに括弧書きしているものは内容を省略したもので、筆者の方で付けた。

図表6 就業志向をたずねた項目の平均点と順位

	札幌地区		釧路地区	
	平均値	順位	平均値	順位
ア. 仕事以外に自分の生きがいをもちたい(仕事以外の生きがい志向)	3.67	1	3.57	1
ク. 安定した職業生活をおくりたい(安定志向)	3.53	2	3.55	2
ウ. 専門的な知識や技術を磨きたい(専門錬磨志向)	3.36	3	3.33	3
カ. 人の役に立つ仕事をしたい(社会的貢献志向)	3.26	4	3.32	4
ケ. 自分に合わない仕事ならしたくない(適性重視志向)	3.25	5	3.21	5
エ. ひとよりも高い収入を得たい(経済的成功志向)	3.08	6	3.12	6
イ. 若いうちは一つの仕事にとどまらずいろいろ経験したい(若年転職志向)	2.79	7	2.69	7
キ. あまりがんびって働かず、のんびりとくらしたい(マイペース志向)	2.54	8	2.55	8
オ. 有名になりたい(社会的名声志向)	2.21	9	2.30	9
コ. 将来の生活については考えていない(現在中心志向)	2.09	10	2.08	10

「ア. 仕事以外に生きがいをもちたい（仕事以外の生きがい志向）」や「ク. 安定した職業生活をおくりたい（安定志向）」が上位にあるが、「ウ. 専門的な知識や技術を磨きたい（専門錬磨志向）」や「カ. 人の役に立つ仕事をしたい（社会的貢献志向）」の点数も高い。また、各項目支持の順位は、札幌地区と釧路地区で全く同じであった。

選択の構造を明らかにするために、自己意識の分析と同様に因子分析する。ここでは自己意識の因子分析の結果とは異なる、札幌地区と釧路地区での重大な相違があることがわかった。両方の結果を掲げておく。

図表 7 就業志向の因子分析（主因子法，プロマックス回転）

（札幌地区）

	因子			
	I 即自 時因子	II 獲得 因子	III 安定 因子	IV 貢献 錬磨因 子
キ. マイペース志向	0.633	0.000	0.122	-0.101
コ. 現在中心志向	0.463	-0.027	-0.047	-0.078
ケ. 適性重視志向	0.208	0.096	0.069	0.125
エ. 経済的成功志向	-0.007	0.740	0.150	-0.100
オ. 社会的名声志向	-0.005	0.533	-0.201	0.140
ク. 安定志向	0.050	-0.011	0.760	0.120
カ. 社会的貢献志向	-0.182	-0.052	0.169	0.476
ウ. 専門錬磨志向	-0.200	0.060	0.015	0.406
イ. 若年転職志向	0.314	0.011	-0.137	0.398
ア. 仕事以外の生き がい志向	0.147	-0.001	0.131	0.305

因子間相関				
I	-	.21	.10	.06
II		-	.16	.36
III			-	.05
IV				-

（釧路地区）

	因子		
	I 転職 獲得因 子	II 安定 因子	III 求道 因子
オ. 社会的名声志向	0.686	-0.151	0.045
イ. 若年転職志向	0.434	-0.078	-0.154
エ. 経済的成功志向	0.434	0.182	0.032
ケ. 適性重視志向	0.278	0.109	-0.170
ク. 安定志向	-0.152	0.812	0.064
ア. 仕事以外の生き がい志向	0.193	0.304	0.060
キ. マイペース志向	0.158	0.286	-0.585
カ. 社会的貢献志向	0.062	0.270	0.430
ウ. 専門錬磨志向	0.287	0.092	0.400
コ. 現在中心志向	0.149	-0.106	-0.345

因子間相関			
I	-	.34	.16
II		-	.05
III			-

図表の見方は、自己意識分析の時と同じである。ここでも札幌地区にフォーカスして考察を進めるが、釧路地区との決定的な違いについて詳述する。

札幌地区では、「キ. あまりがんばって働かず、のんびりとくらしたい（マイペース志向）」と「コ. 将来の生活については考えていない（現在中心志向）」からなる「即自時因子」が第一因子となっている。自分に即して（合うように）という意味での「即自」と、現在中心志向を「即時」（即刻という意味）と重ねて読み込み、この名前をつけた。

第二因子は、「エ. ひとよりも高い収入をえたい（経済的成功志向）」と「オ. 有名になりたい（社会的名声志向）」が結びついた「獲得因子」である。

第三因子は、「ク. 安定した職業生活を送りたい（安定志向）」だけからなる「安定因子」である。

第四因子は、「カ. 人の役に立つ仕事をしたい（社会的貢献志向）」と「ウ. 専門的な知識や技術を磨きたい（専門錬磨志向）」が結びついた「貢献錬磨因子」となる。

以上のように、四因子から構成されている。

釧路地区では、「オ. 有名になりたい（社会的名声志向）」、「イ. 若いうちは一つの仕事にとどまらずいろいろ経験したい（若年転職志向）」そして「エ. ひとよりも高い収入を得たい（経済的成功志向）」が結びついた「転職獲得因子」が第一因子である。「ケ. 自分に合わない仕事ならしたくない（適性重視志向）」は、因子負荷量が0.4を下回っているので無視した。

第二因子は、「ク. 安定した職業生活を送りたい（安定志向）」だけからなる「安定因子」である。「ア. 仕事以外に生きがいをもちたい（仕事以外の生きがい志向）」も因子負荷量が小さいので無視した。

第三因子は、「キ. あまりがんばって働かず、のんびりとくらしたい（マイペース志向）」

が負の因子負荷量をもち、これに「カ．人の役に立つ仕事をしたい（社会的貢献志向）」と「ウ．専門的な知識や技術を磨きたい（専門錬磨志向）」が結びついた「求道因子」である。

札幌地区と釧路地区の違いを強調するために、この第三因子に注目する。

釧路地区の「求道因子」においては、札幌地区の「即自時因子」を構成する項目（キ、コ）の符号が負に逆転し、これに「貢献錬磨因子」を構成する項目（カ、ウ）が結びついていた。札幌地区の「貢献錬磨因子」に「即自時因子」を否定したものが結びつき、「求道因子」となっていた。逆に釧路地区の結果を基にして言うと、札幌地区においては、釧路地区の「求道因子」から厳しさが消え、自己実現的なニュアンスの強い「貢献錬磨因子」となり、マイペースで、将来を考えない在り方が独立した因子（「即自時因子」）の位置を占めるようになったのである。

就業意識の因子分析は、道北土別地区において、2004年に同様のアンケート調査を高校3年生対象に行っている¹⁴。土別地区の高校3年生の就業意識の因子は、釧路地区と全く同じで、「求道因子」が強力な点に特徴があった。

まず「転職獲得因子」や「安定因子」は就業を手段として理解したものとしてできる。そして「求道因子」は自己実現や社会貢献を表出的に求めることだけではなく、就業へ禁欲的な態度をもっていると言えるだろう。しかし「即自時因子」は、自分に合った就業を、すぐに手に入れようとするものである。ここには、未来という時間との関係で現在をとらえる発想が欠落している。また目的としての就業を捉える在り方や手段として就業を捉える在り方とは異なっている。言わば「方法」のみが、指定されている。何を求めているのかが欠落している。この点について因子間相関係数の分析が示唆を与えてくれる。

因子間相関係数を検討してみよう。最も相関係数が高いのは、「獲得因子」と「貢献錬磨因子」の関係で0.36もある。すなわち、「獲得因子」の獲得の対象は専門的知識や技能も意識している。また逆も言える。これに次ぐのが、「即自時因子」と「獲得因子」の関係で0.21となっている。因子相関係数がプラスであることから、方法だけが指定されていた「即自時因子」は、経済的成功や社会的名声を求めていることがわかる。

このように解釈すると、「即自時因子」に現れているものは、今すぐに自分の望むように、「達成する」ことである。「獲得する」と言っても良いかもしれない。すなわち、就業観のひとつとして理解するよりも、消費のそれに近いものとして理解することができるだろう。

「即自時因子」のより詳細な特徴の説明は6節に譲るとして、このそれぞれがどのような要因に規定されているかを、重回帰分析という手法で確かめておく。

（2）就業因子の規定要因

図表8の見方は、図表5に準じている。

「即自時因子」は、「目標不明」（やりたいものが見つからない）であると強まる。これは非常に強い。そして進路希望が「専門学校・各種学校進学」であるか、または学校が「進学校」であると弱くなる。このR²乗値は非常に高く、このモデルの適合度が高いことを表している。

「獲得因子」は、「男性」であること、そして「友人数」が多いことで強まる。そして逆に、進路希望が「就職」であること、そして「学校生活」に「充実感がある」と弱まる。

「安定因子」は、進路希望が「就職」や「四年制大学進学」の場合、そして「親子でお互

図表 8 就業因子の規定要因（重回帰分析）

（札幌地区）

		即自時因子		獲得因子		安定因子		貢献錬磨因子	
		標準偏回 帰係数	有意 確率	標準偏回 帰係数	有意 確率	標準偏回 帰係数	有意 確率	標準偏回 帰係数	有意 確率
学校	進学校ダミー	-0.083	***	-0.027		-0.064	*	-0.012	
	進路多様校ダミー	-0.036		-0.027		0.039		0.007	
性別	男性ダミー	0.007		0.172	***	-0.040		-0.033	
	就職ダミー	-0.042		-0.091	**	0.129	***	-0.076	*
進路希望	専門学校・各種学校進学ダミー	-0.115	***	0.006		0.073	*	-0.008	
	四年制大学進学ダミー	-0.081	*	0.005		0.128	***	-0.065	
保護者職業	ホワイトカラー上層ダミー	-0.003		-0.014		0.004		0.038	
	ブルーカラーダミー	-0.002		-0.021		-0.010		0.012	
学校生活	学校生活に充実感ありダミー	-0.042	*	-0.081	***	0.031		0.169	***
目標不明	「やりたいものが見つからない」ダミー	0.329	***	0.011		0.016		-0.141	***
親子関係	「親子でお互いに話をする機会が多い」ダミー	-0.031		-0.047	*	0.056	**	0.063	**
友人	友人数(20人以上いるか)ダミー	-0.036		0.103	***	0.015		0.080	***
N(ケース数)		2400		2400		2400		2400	
調整済みR2乗値		0.134		0.050		0.013		0.081	
F値		30.436		11.070		3.416		17.658	
有意確率		0.000		0.000		0.000		0.000	

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

※ ダミーとはダミー変数のこと。進学校ダミーの場合、進学校であれば1をそうでなければ0を用いている。もともと変数でないものを変数として扱うときに用いる統計的な手法である。

いに話をする機会が多い」と強まる。学校で「進学校」であると弱まるが、これは弱い。

このように「安定因子」は、全体にまんべんなく強い因子であるため、これを弱くする項目は少ない。特に進路希望で、就職と四年制大学進学が共に上がっているのは、この分析の元になった調査が卒業年度の9～10月であったことからもうなずける内容だ。

「貢献錬磨因子」は、「学校に充実感がある」場合、「友人数」が多い場合、そして「親子でお互いに話をする機会が多い」場合に強まる。弱めるのは、「目標不明」の場合である。

就業意識において、進路希望の影響力は強いが、学校や性別、保護者の職業の効果は限定されているように思われる。しかし自己意識の重回帰分析に比べて、一部ではあるが、影響力をもっているものがあることを確認できる。すなわち、「即自時因子」への進学校と専門学校・各種学校進学希望のマイナスの効果や「獲得因子」への性別のプラスの効果、そして「安定意識」への進路の効果である。

そして自己意識の重回帰分析の結果と同様に「学校生活」や「目標不明」、そして「友人関係」の効果は大きい。しかし少し部分的になっている。また各項目において、異なる因子が反対の効果を発揮する形になっている。

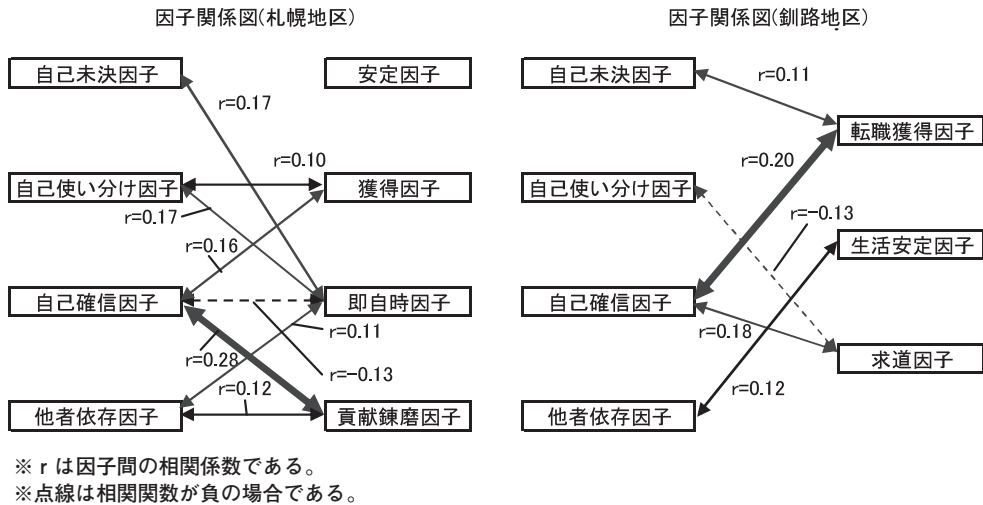
最後に、論文の展開との関係で、「即自時因子」が「目標不明」と強い正の関係をもっていたことを確認しておく。これは「即自時因子」を構成する項目に、「コ. 将来の生活については考えていない（現在中心志向）」が含まれていることからもうなずける結果である。また自己意識分析で、「自己未決因子」や「自己使い分け因子」も「目標不明」と強い関係があったことも思い出しておこう。

それでは自己意識と就業意識の関係は、どうなっているのだろうか。

5. 自己意識と就業意識の関係

自己意識因子と就業意識因子の関係を図示したのが図表9である。それぞれの因子の因子得点の相関をみたものである。rは相関係数である。

図表9 自己意識と就業意識の関係



札幌地区と釧路地区の比較から指摘できるのは、地区の違いを越えた共通点と相違点である。共通点は、釧路地区では「自己確信因子」が「転職獲得因子」と「求道因子」と、札幌地区でも「自己確信因子」が「獲得因子」と「貢献錬磨因子」と接続しているところにある。これが第一の接続関係である。

相違点は、札幌地区では自己意識の「自己未決因子」や「自己使い分け因子」が「即自時因子」と接続しているが、釧路地区でそのような接続が見当たらないところにある。「自己未決因子」と「転職獲得因子」が弱くつながり、「自己使い分け因子」が「求道因子」と負の関係でつながるだけである。この札幌地区に特徴的な接続関係を、第二の接続関係と考える。

また札幌地区の「自己確信因子」の「貢献錬磨因子」と「獲得因子」への関係は、「貢献錬磨因子」と「獲得因子」の相関係数が高いので、念のために偏相関分析を行った。結果として「自己確信因子」と「獲得因子」の偏相関係数は0.03に低下した。このことから「自己確信因子」は、「貢献錬磨因子」のみと相関していると考えて良い。

同様に「自己未決因子」と「自己使い分け因子」も相関係数が高いので、「自己未決因子」と「自己使い分け因子」の「即自時因子」に対する偏相関係数を計算した。共に偏相関係数は0.10であった。「即自時因子」は両者と関係していると考えて良い。

第一の接続関係は、労働の中で社会貢献し鍛えられ、そして自分も成長するというものである。これは青年心理学が、青年期の発達を考えるとときに思い浮かべるモデルであり、進路指導やキャリア教育においても前提とされている考え方、職業発達論やキャリア発達論の発

達モデルと言っても良いだろう。特に釧路地区では「自己確信因子」と「求道因子」がつながり、未来が志向されている。大雑把な言い方ではあるが、自己実現と就業（労働）が未来（目標）志向を軸に結びついている。

それに対して第二の接続は、それと原理的に異なる接続である。「自己未決因子」と「自己使い分け因子」に共通する要素を、仮に「自己を一つに決めない」自己意識だとする。そうすると、「自己を一つに決めない」自己意識が、「即自時因子」という「マイペースで、将来を考えない」就業意識とつながっていると押えることができる。同じように大雑把な言い方をすると、自己の非決定と無時間的で自己本位の達成が結びついている。

すなわち、第一の接続関係が発達を軸とした自己と労働の関係であるとしたら、第二の接続は非発達を軸とした＜決定されない自己＞と＜達成的な＞就業の関係であると言っても良いだろう。後者を、＜達成的な＞就業としたのは、先にも述べたように、「即自時因子」には何をするのかが規定されず、いわば方法にのみ焦点化されているからである。就業としたのは、「即自時因子」と関係が深い、獲得と目標を実現するという、未来を起点に現在の働きかけ方を考える「労働」とはずれている点を強調するためである。

暫定的に、この二つに名前をつけておくことにしよう。第一のそれを＜発達型＞、第二のそれを＜非発達型＞とする。＜非発達型＞は、積極的な名づけではないが、教育が念頭におく主体の変化（発達）になじまない在り方がはらまれていることを表している。

ここまでの考察から、高校生のなかに、＜発達型＞と原理的に異なる＜非発達型＞があることが明らかになった。この＜非発達型＞は、未来を起点に今に関わるという在り方ではない。

ところで以前、宮台真司が『終わりの日常』において、「終わりの日常」を生きる生き方として現在の生活の強度を生きる在り方を、すなわち「まったり」生きるという在り方を提案していた¹⁵。このこととどのような関係にあるのだろうか。

＜非発達型＞とは、どのようなものか。どのような意識と関わっているのか、どのような背景をもつのか、以降ではこの点に絞って考えてみたい。

6. ＜非発達型＞とはどのようなものか

＜非発達型＞を構成する因子は、「自己未決因子」と「自己使い分け因子」そして「即自時因子」であった。このそれぞれと社会意識や将来意識との関係を、順番に見ていく。

（1）＜非発達型＞と生活意識と将来意識——社会への悲観と努力の無意味化

＜非発達型＞と社会・生活意識の関係を考察する前に、札幌地区の高校生がどのような社会・生活意識をもっているのかをみておく。取り上げた項目と支持された順位は、図表 10 を参照してほしい。図表 3 や 6 と同様に 4 点尺度を用い、平均点を出した。

図表 10 社会・生活意識

(札幌地区)

項目	平均値	標準偏差	ケース数(N)
ア. どんなことにでも、努力して高い目標を達成することは大切だ	3.46	0.70	2430
ウ. 社会で成功できるかどうかは、本人の努力次第だ	3.42	0.79	2426
イ. 努力した人としない人では、将来の生活に格差ができる	3.34	0.83	2428
シ. 日本は悪い方向に向かっていると思う	3.07	0.87	2426
ソ. 自分の将来は幸せなものになっていると思う	2.96	0.89	2402
サ. 今は夢がかないにくい世の中だ	2.93	0.94	2429
セ. 自分は今、幸せだ	2.88	0.96	2405
ケ. 今の生活には満足している	2.68	0.96	2427
キ. 能力とは関係なく、学歴はそれ自体で意味がある	2.43	0.91	2427
コ. この社会には夢や希望がたくさんある	2.42	0.98	2426
カ. 学歴は、本人の実力をかなり反映している	2.37	0.93	2427
ク. 学歴によって社会的地位や収入が異なるのは当然だ	2.31	0.98	2426
ス. 自分は将来、大きなことをして成功すると思う	2.26	0.91	2404
オ. どんな学校を出たかによって、人生がほとんど決まってしまう	2.09	0.98	2422
エ. うまれつきの能力や才能には違いがあるので、努力しても仕方がない	2.02	0.89	2424

努力を肯定する項目、例えば「ア. どんなことにでも、努力して高い目標を達成することは大切だ」等が、上位3項目を占めていることから、高校生は努力重視の社会・生活意識をもっているといえる。

そしてこの努力と対応するかのようにより、現在の自分の評価は、「ソ. 自分の将来は幸せなものになっていると思う」(2.96)、「セ. 自分は今、幸せだ」(2.88)と「ケ. 今の生活には満足している」(2.68)となっている。これらは、中央値の2.5より高く、幸せと満足を感じているようだ。

しかし同時に、「シ. 日本は悪い方向に向かっていると思う」(3.07)や「サ. 今は夢がかないにくい世の中だ」(2.93)とも思っている。

この努力主義と幸福感・満足感とは非発達型でも肯定されるのだろうか。

①「自己未決因子」の場合——「社会への悲観」と「不幸せ感・不満感」

図表 11 自己未決因子×社会・生活意識 (札幌地区)

社会・生活意識(プラスのもの)	相関係数	有意確率	社会・生活意識(マイナスのもの)	相関係数	有意確率
サ. 今は夢がかないにくい世の中だ	0.17	***	セ. 自分は今、幸せだ	-0.21	***
シ. 日本は悪い方向に向かっていると思う	0.17	***	ケ. 今の生活には満足している	-0.20	***
オ. どんな学校を出たかによって、人生がほとんど決まってしまう	0.10	***	ソ. 自分の将来は幸せなものになっていると思う	-0.14	***
エ. うまれつきの能力や才能には違いがあるので、努力しても仕方がない	0.10	***	コ. この社会には夢や希望がたくさんある	-0.09	***
ク. 学歴によって社会的地位や収入が異なるのは当然だ	0.09	***			
キ. 能力とは関係なく、学歴はそれ自体で意味がある	0.05	*			

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

「自己未決因子」のケース毎の因子得点と社会・生活意識の解答との相関係数を求めたものが、図表 11 である。相関係数の有意確率が 5 % 水準未満のものを載せてある（以下の図表では同様の基準を採用した）。

相関係数でプラスのもの（正の相関）において、「サ．今は夢がかないにくい世の中だ」や「シ．日本は悪い方向に向かっていると思う」が強い。社会に対する悲観的な見方をもっていることがここからわかる。学歴の力で人生が決まることへの支持（諦め）もある。

同様に、マイナスのもの（負の相関）では、「セ．自分は今、幸せだ」と「ケ．今の生活には満足している」が強く否定されている。幸福感や生活への満足感をもてない。

この両者からは、今の社会を悲観し、同時に幸せを感じられない状況が浮かびあがってくる。学歴に関する評価も諦めの裏返しのようなのだ。

②「自己使い分け因子」の場合——「努力の無意味さ」と「不幸せ感・不満感」

「自己使い分け因子」は＜非発達型＞の一極を構成していた。「自己使い分け因子」も同様に確認しておきたい。

図表 12 自己使い分け因子×社会・生活意識（札幌地区）

社会・生活意識(プラスのもの)	相関係数	有意確率	社会・生活意識(マイナスのもの)	相関係数	有意確率
エ. うまれつきの能力や才能には違いがあるので、努力しても仕方がない	0.14	***	セ. 自分は今、幸せだ	-0.20	***
オ. どんな学校を出たかによって、人生がほとんど決まってしまう	0.12	***	ケ. 今の生活には満足している	-0.17	***
ク. 学歴によって社会的地位や収入が異なるのは当然だ	0.12	***	コ. 自分の将来は幸せなものになっていると思う	-0.16	***
サ. 今は夢がかないにくい世の中だ	0.11	***	ク. この社会には夢や希望がたくさんある	-0.13	***
シ. 日本は悪い方向に向かっていると思う	0.10	***	ス. 自分は将来、大きなことをして成功すると思う	-0.05	*
キ. 能力とは関係なく、学歴はそれ自体で意味がある	0.10	***			
カ. 学歴は、本人の実力をかなり反映している	0.05	*			

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

「自己使い分け因子」と関連深い社会・生活意識の相関係数を求めたのが図表 12 である。

「自己未決因子」と項目は部分的に共通するが、順位が違う。特に、「自己使い分け因子」と「エ．うまれつきの能力や才能には違いがあるので、努力しても仕方がない」の関係が強い。また学歴の力を肯定する、「オ．どんな学校を出たかによって、人生がほとんど決まってしまう」、や「ク．学歴によって社会的地位や収入が異なるのは当然だ」が相関している。

この、「努力は無意味」な一方で学歴の力を肯定するという対比が目を引く。この解釈は、二つ可能だと考えられる。「学歴をもっていないものは努力しても無駄だ」という理解と、「努力しなければ学歴は手に入らないので、努力しない自分は学歴がないという状況を受け入れるしかない」という理解である。前者は立場によって意味が変わってくるが、学歴がないという立場を前提にすると、後者の理解に重なってくる。すなわち、「自分の努力は学歴社会では意味がない」、だから「努力はしない」というような理解である。

「自己未決因子」では、サやシという大きな社会状況に対する悲観が高い位置を占めてい

たが、「自己使い分け因子」では身近な状況、特に個人的な努力の無意味さや諦めと関わっている。

また不幸せ感や不満感とは「自己未決因子」と共通している。

③「即自時因子」の場合——「努力の無意味さ」と「不幸せ感」

最後に＜非発達型＞のもう一方の極である「即自時因子」と社会・意識の関係を確認しておく。

図表 13 即自時因子×社会・生活意識（札幌地区）

社会・生活意識(プラスのもの)	相関係数	有意確率	社会・生活意識(マイナスのもの)	相関係数	有意確率
エ. うまれつきの能力や才能には違いがあるので、努力しても仕方がない	0.28	***	ソ. 自分の将来は幸せなものになっていると思う	-0.16	***
サ. 今は夢がかないにくい世の中だ	0.20	***	コ. この社会には夢や希望がたくさんある	-0.16	***
シ. 日本は悪い方向に向かっていると思う	0.15	***	イ. 努力した人としない人では、将来の生活に格差ができる	-0.15	***
オ. どんな学校を出たかによって、人生がほとんど決まってしまう	0.15	***	ア. どんなことにでも、努力して高い目標を達成することは大切だ	-0.13	***
ク. 学歴によって社会的地位や収入が異なるのは当然だ	0.08	***	ウ. 社会で成功できるかどうかは、本人の努力次第だ	-0.12	***
キ. 能力とは関係なく、学歴はそれ自体で意味がある	0.07	***	セ. 自分は今、幸せだ	-0.11	***
カ. 学歴は、本人の実力をかなり反映している	0.06	**	ス. 自分は将来、大きなことをして成功すると思う	-0.08	***
			ケ. 今の生活には満足している	-0.08	***

※ *** $p < 0.001$ ** $p < 0.01$ * $p < 0.05$

「即自時因子」と「自己未決因子」と「自己使い分け因子」の共通性と違いに注意したい。プラスの社会意識は全体的に共通する。「エ. うまれつきの能力や才能には違いがあるので、努力しても仕方がない」が特に強い。社会への悲観も重要な位置を占めている。さらに学歴の力を肯定するものもある。

他方で、マイナスの社会意識においては共通するものが少ない。「ソ. 自分の将来は幸せなものになっていると思う」と「コ. この社会には夢や希望がたくさんある」は例外的に共通している。社会と将来への悲観である。

大きく違うのは、「イ. 努力した人としない人では、将来の生活に格差ができる」や「ア. どんなことにでも、努力して高い目標を達成することは大切だ」が否定されていることだ。プラスの項目で「努力の無意味さ」をあげるだけでなく、努力の価値とその成果を否定している。「自己未決因子」や「自己使い分け因子」ではこの項目は出てこない。すなわち、個人的な努力の無意味さはあったが、「即自時因子」のような社会的価値としての努力とその効果を否定しているわけではない。

逆に、「即自時因子」ではあまり支持されていないものを検討する。マイナスのもので、「セ. 自分は今、幸せだ」と「ケ. 今の生活には満足している」が小さい。「自己未決因子」では-0.20, 「自己使い分け因子」では-0.17と大きな位置を占めていたことを考えると、「即自時因子」の生活に対する不満が大きくないこと(-0.08)は注目すべきである。「自己未決因子」と「自己使い分け因子」では、個人的な努力の無意味さは不幸せ感に結びついている。

しかし、社会的な価値としての努力や努力の効果の否定にまで進むならば、生活の不満足感に結びつきにくい。うまれつきの能力や才能は、どうしようもない。学歴という社会的秩序も、どうしようもない。だからあまり不満はない。

以上のように、＜非発達型＞は「社会への悲観」、「努力の否定」、「学歴の力を肯定」そして「不幸せ感」が共通していた。しかし、重要な違いも示唆される。それは努力と生活の満足の結びつき方に現れている。「自己未決因子」と「自己使い分け因子」では、個人的な、自分の「努力」が「無意味」であることと「生活の不満足」が結びついていた。これは努力が報われないことへの不満と読めないこともない。しかし「即自時因子」では、努力はそもそも価値がない（「カンケーない」）。だからそのことに不満はない。

このように、＜非発達型＞のなかでも「即自時因子」は、性格がより強調されている。特に努力の否定という点で顕著である。時間を貫く努力の継続的な性格は、この因子の時間意識（「現在中心志向」）と強く結びついている可能性がある。

時間意識の意味については次項でさらに深めたい。

（２）＜非発達型＞と将来意識——社会と将来への悲観

＜非発達型＞と将来意識の関係についてみてゆくと、その前提として将来意識について聞いた項目とそれへの支持について見ておきたい。図表 14 を参照してほしい。

図表 14 将来意識

（札幌地区）

項目	平均値	標準偏差	ケース数(N)
ウ. 自分らしい人生を送ること	3.77	0.50	2427
コ. 自分に適した職業をみつけること	3.76	0.49	2430
サ. 身近な友人と楽しくいすること	3.64	0.58	2426
オ. 温かい家庭をきずくこと	3.56	0.72	2429
エ. チャンス(転職・仕事・結婚などにおいて)を逃さないようにすること	3.48	0.66	2431
キ. 仕事や家庭のほかに、打ち込める趣味をもつこと	3.44	0.65	2427
ソ. どんなことでもチャレンジすること	3.29	0.72	2426
ケ. 高い収入を得ること	3.11	0.74	2430
イ. 広く社会のために尽くすこと	2.90	0.79	2427
ス. なにがしかの専門を極めること	2.89	0.85	2426
ア. 高い社会的地位につくこと	2.70	0.82	2428
ク. 不安な要素が多いことは、できるかぎりしないようにすること	2.61	0.81	2422
セ. 遠い将来の目標のためにコツコツと努力するより、現在したいことをすること	2.58	0.82	2426
シ. 仕事に生きること	2.54	0.80	2429
タ. 特定の「心がけ」をもたないようにすること	2.20	0.76	2423
カ. 将来については、なるようになるので、あまり考えないこと	2.16	0.82	2425

全体的にみて、「ウ. 自分らしい人生を送ること」、「コ. 自分に適した職業をみつけること」、「サ. 身近な友人と楽しくいすること」、そして「オ. 温かい家庭をきずくこと」が強く支持されていることがわかる。高校生は、自分らしさと身近な幸せを願っていると言っても良いだろう。

①「自己未決因子」と将来意識——将来の否定

図表 15 自己未決因子×将来意識（札幌地区）

将来意識(プラスのもの)	相関係数	有意確率	将来意識(マイナスのもの)	相関係数	有意確率
セ. 遠い将来の目標のためにコツコツと努力するより、現在したいことをすること	0.08	***			
カ. 将来については、なるようになるので、あまり考えないこと	0.08	***			
ス. なにがしかの専門を極めること	0.06	**			
キ. 仕事や家庭のほかに、打ち込める趣味をもつこと	0.04	*			
タ. 特定の「心がけ」をもたないようにすること	0.04	*			

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

「自己未決因子」と関連深い将来意識の相関係数を求めたのが図表 15 である。

全体的な印象とは大きく異なっていることがわかる。全体として相関係数が低く、将来に対する関心のなさが表れている。将来的なビジョンをもたないようにするという「セ. 遠い将来の目標のためにコツコツと努力するより、現在したいことをすること」や「カ. 将来については、なるようになるので、あまり考えないこと」も支持されているがそれほど高くなく、「現在したいことをする」や「あまり考えない」を強く支持しているようではなさそうだ。相関係数は低いが、スの「なにがしかの専門を極めること」もあげられている。

また将来意識においてマイナスのものはない。

ところで、自己意識の因子は札幌地区と釧路地区で共通していたことを思い出してほしい。また将来意識は、同じ質問項目を用いている。そのため、自己未決因子と将来意識の相関は釧路でも同じものを作成することができる。それが図表 16 である。

図表 16 自己未決因子×将来意識（釧路地区）

将来意識(プラスのもの)	相関係数	有意確率	将来意識(マイナスのもの)	相関係数	有意確率
タ. 特定の「心がけ」をもたないようにすること	0.09	**			
エ. チャンス(転職・仕事・結婚などにおいて)を逃さないようにすること	0.07	*			

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

札幌地区において弱いけれど確かに現れていた「将来否定」の項目が釧路地区ではスッポリと抜け落ちている。先に、「弱い」と断じたが、やはりこれが札幌地区の特徴であった。釧路地区では、処世術に近いものだけが上がっている。

ここにみるように、札幌地区と釧路地区で自己意識の因子は同じであっても、その意味するところは異なる。札幌地区の就業意識において、「即自時因子」に特徴的に現れたものは、自己意識の中に強く浸透している。

このことは「自己使い分け因子」でも同じだろうか。それを次に確かめる。

②「自己使い分け因子」と将来意識——将来と身近な幸福の否定と世俗的な成功の追求

図表 17 自己使い分け因子×将来意識（札幌地区）

将来意識(プラスのもの)	相関係数	有意確率	将来意識(マイナスのもの)	相関係数	有意確率
ケ. 高い収入を得ること	0.10	***	オ. 温かい家庭をきずくこと	-0.07	**
カ. 将来については、なるようになるので、あまり考えないこと	0.07	**	ソ. どんなことでもチャレンジすること	-0.06	**
セ. 遠い将来の目標のためにコツコツと努力するより、現在したいことをすること	0.06	**	ウ. 自分らしい人生を送ること	-0.05	**
ク. 不安な要素が多いことは、できるかぎりしないようにすること	0.05	*	サ. 身近な友人と楽しくいけること	-0.05	*
ア. 高い社会的地位につくこと	0.05	*			

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

「自己使い分け因子」と将来意識の関係を見たのが図表 17 である。

相関係数が低いという点で「自己未決因子」と類似している。しかし、その構成は大きく異なっている。「自己未決因子」と同じカ（「あまり考えない」）やセ（「現在したいことをする」）も 2 位と 3 位にあげられているが、最も相関係数が高いのは「ケ. 高い収入を得ること」である。努力の否定と高い収入を得ることが結びついている。

マイナスのものも相関係数は低い。しかし、いくつかあがっている。「オ. 温かい家庭をきずくこと」、「ウ. 自分らしい人生を送ること」そして「サ. 身近な友人と楽しくいけること」は、生徒の将来意識において一般的に支持されている項目（第 1, 3, 4 位）であるため、特徴的である。高校生が将来に対して基本的に期待することを放棄する形になっている。

釧路地区についても見ておこう。図表 18 である。

図表 18 自己使い分け因子×将来意識（釧路地区）

将来意識(プラスのもの)	相関係数	有意確率	将来意識(マイナスのもの)	相関係数	有意確率
タ. 特定の「心がけ」をもたないようにすること	0.07	*	サ. 身近な友人と楽しくいけること	-0.10	**
ケ. 高い収入を得ること	0.07	*	オ. 温かい家庭をきずくこと	-0.09	**
			ウ. 自分らしい人生を送ること	-0.09	**
			ソ. どんなことでもチャレンジすること	-0.06	*

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

「自己未決因子」と同様に、「将来否定」の項目が抜け落ちている。その一方で、生徒の将来意識において支持された項目は、同様に否定されている。

釧路地区との比較からわかったことは、札幌地区で将来を否定する意識が浮上してきているということである。そしてこの意識は、就業意識において「即自時因子」が浮上したと深く結びついている。このことを次に明らかにする。

③「即自時因子」と将来意識——将来と努力の強い否定そして社会的関心の喪失

図表 19 即自時因子×将来意識（札幌地区）

将来意識(プラスのもの)	相関 係数	有意 確率	将来意識(マイナスのもの)	相関 係数	有意 確率
カ. 将来については、なるようになるので、あまり考えないこと	0.34	***	イ. 広く社会のために尽くすこと	-0.19	***
セ. 遠い将来の目標のためにコツコツと努力するより、現在したいことをすること	0.29	***	シ. 仕事に生きること	-0.16	***
ケ. 高い収入を得ること	0.21	***	ス. なにがしかの専門を極めること	-0.13	***
タ. 特定の「心がけ」をもたないようにすること	0.19	***	ソ. どんなことでもチャレンジすること	-0.08	***
ク. 不安な要素が多いことは、できるかぎりしないようにすること	0.19	***			
キ. 仕事や家庭のほかに、打ち込める趣味をもつこと	0.15	***			
サ. 身近な友人と楽しくいけること	0.13	***			
ア. 高い社会的地位につくこと	0.06	**			
エ. チャンス(転職・仕事・結婚などにおいて)を逃さないようにすること	0.04	*			

※ *** p<0.001 ** p<0.01 * p<0.05

プラスでは、あげられているものの順位は「自己未決因子」や「自己使い分け因子」と類似している。しかし強度が全く異なる。

「即自時因子」は、将来を強く否定し現在を力強く肯定する。特に、「カ. 将来については、なるようになるので、あまり考えないこと」の相関係数が0.34、そして「セ. 遠い将来の目標のためにコツコツと努力するより、現在したいことをすること」の0.29は非常に強く関連していることがわかる。社会・生活意識の分析において、努力の意味が否定されていたが、それが将来を志向することを否定することとしっかりと結びついていることがわかる。

さらに「ケ. 高い収入を得ること」が強いことも目を引く。これに「キ. 仕事や家庭のほかに、打ち込める趣味をもつこと」、「サ. 身近な友人と楽しくいけること」、そして「ア. 高い社会的地位につくこと」も入っている。これらは将来と努力を否定することと矛盾なく結びついている。

マイナスの項目は、「自己未決因子」は一項目も上がってこなかったので、「自己使い分け因子」と比較してみる。「イ. 広く社会のために尽くすこと」を否定する相関係数(-0.19)は強い。さらに、「シ. 仕事に生きること」や「ス. 何がしかの専門を極めること」も含め、仕事を通じて社会にポジティブに関わる将来が否定されている。逆に、「自己使い分け因子」にあった身近な生活の否定がない。すなわち将来において、身近な生活に否定的であるのか、それとも社会に関わることに否定的であるのかが大きく違う点である。

(3) 小 括

札幌地区の高校3年生の自己意識と就業意識の接続は二つあった。＜発達型＞と、＜非発達型＞である。さらに＜非発達型＞に注目し、その意味を明らかにした。

まず、＜非発達型＞を構成する「自己未決因子」、「自己使い分け因子」、そして「即自時因子」を別々に、社会・生活意識や将来意識とどのような関係にあるかを明らかにしてきた。

社会・生活意識の検討から見てきたのは、強度の違いがあるけれど、この因子のどれもが、

「不幸せ感」，「不満足感」を強く感じつつ，「学歴社会」でもある社会に対して悲観し，努力することを無意味と感じている姿であった。前述した「まったり」生きる在り方との関係では，高校生は，不幸せを感じつつ「まったり」生きようとしている。宮台が論じた時代と現在とでは経済的環境も大きく変わっていることが関係しているだろう。地域差についても同様である。ただし，この三つのなかでは努力の捉え方には違いがあった。

将来意識の検討から見えてきたのは，将来の否定と努力の否定，そして経済的成功の強い肯定である。追求する共通の価値としては，経済的成功が大きな位置を占めていた。さらに世俗的成功の追求と身近な幸福を否定する「自己使い分け因子」と，社会に関わることそのものに否定的な「即自時因子」という違いもあった。

全体に共通していた将来の否定は，重要な示唆を含んでいる。自己意識と就業意識の関係において，二つの類型を導き出したが，＜非発達型＞は，より積極的に将来を否定するものであった。＜非発達型＞では，このように将来を悲観あるいは否定し，未来へ関わってゆく努力の効用と意味が感じられていない。この状況を，「時間的展望の限定」と表現しておきたい。前述した「目標不明」をここでの結果も加えて解釈すると，「目標がわからない」といった消極的なものから，部分的に「目標をもたない」という積極的なところにずれ込んでいると言えそうである。

最後に，努力の効用の無意味化は，一見すると，学校階層の影響を感じさせるが，各因子の重回帰分析でふれたように，親の職業や学校，そして進路には関わっていない。例外的に関わってくるのは，「即自時因子」を弱めるものとして進学校であること，そして専門学校・各種学校進学希望であることである。

7. ま と め

ここまでみてきたことを大きくまとめてみよう。

まず，従来異なる分野で断片的に捉えられていた自己意識と就業意識は，実は密接に結びついていたことである。特に自己意識の＜多元／一元＞が，目標の＜不明／明＞を経由して，就業意識における時間的秩序化の在り方と関わっていた。

すなわち，高校3年生のなかに生まれている新しい自己意識と就業意識をつなぐ一貫した在り方として，従来の＜発達型＞とは異なる＜非発達型＞が生まれていた。

そして，この型の違いは，時間的な自己の秩序化の在り方，すなわち未来という起点から現在をどのように組織するのかという志向性の違いである。

＜発達型＞は，自己の確立と就業意識の確立がつながる在り方であった。それゆえに未来や将来をもっている。＜非発達型＞は，自己意識を確定することを避ける自己意識と，職業的発達の展望をもたずに，今この時に集中する意識が結びついたものであった。未来や将来という時間に対する構えをもっていない。あるいは否定する。

この＜非発達型＞が「新しい」ものであるのか，札幌という地域的な産物であるのかをまだ断言することはできない。しかし，広く若者に関する議論に耳を傾けていると，この＜非発達型＞は時代の必然とも言える，現在の社会に適合的な型であることに気がつく。

そのことに少しふれよう。

第一に，雇用・労働問題の影響があろう。雇用・労働の「改革」として1990年代中盤から

進められてきた、雇用の非正規化の問題である。

日本経営者団体連盟は1995年に、『新時代の「日本的経営」―挑戦すべき方向とその具体策』を発表した¹⁶。

そこでは従業員は三つのグループに分けて処遇することが主張された。「長期蓄積能力活用型グループ」は、「期間の定めのない雇用契約」で、従来通りの雇用であるが、「雇用柔軟型グループ」だけでなく「高度専門能力活用型グループ」も、「有期雇用」である。従業員を広く教育するのではなく、非正規雇用の安価な労働力を積極的に使用すべきだと主張されている。「即戦力」がキーワードだ。教育すべき労働者は、限定されている。

これらの主張は実行に移されてから、もはや10数年が過ぎている。

ここでの話に置き換えるなら、＜発達型＞は全ての労働者に求められてはいない。柔軟に使い回される労働力に、「発達」は必要ない。

高校生がこの企業からのメッセージをどのように受け取っているのかは定かにはわからないけれど、未来に向かって努力し成長することを、全ての労働者が求められているわけではないことは、伝わっているに違いない。

第二に、現在の高度消費社会の影響があろう。高度消費社会に適応的な人間像を、内田は消費主体モデルと考えている。

内田の主張で重要な点は、市場における交換は、労働と異なり、時間という概念を必要ないものとする点である。それを内田は、「消費とは本来的に無時間的な行為であり、消費者は無時間的な『幽霊』なのです」と語っている¹⁷。もう少し説明を付け加えよう。時間のなかで変わらない人間はいないにも関わらず、「ひとたび消費主体として市場に出現してしまった人間は、『等価交換を行っている過程で、消費主体は決して変化してはならない。その価値観を変えてはならない。その交換レートを変えてはならない。その度量衡を変えてはならない』という厳重な禁則から逃れることができない¹⁸。

すなわち消費主体は、時間をもってはならないから、学ぶこともないし、努力することもない。その代わり商品を購入することで、自己実現を図る¹⁹。

引用を続けてきたが、要点は以下ようになる。

内田は労働主体が時間概念を必要としていると考えているが、先に見たように雇用・労働問題で現在要請されている人間像にも時間概念（＜発達＞）は必要とされない。高度消費社会で要請される人間像にダイレクトに重なってくる。言い換えるなら、非正規雇用において要求される労働と消費には、発達する（学ぶ）必要がない。努力も必要ない。時間をもたない、より正確に言えば、時間をもってはならないという消費主体と同じ要請の元にあると言える。

分析の結果からわかった、＜非発達型＞における方法だけの就業意識と経済的成功をめざすこと、そして「時間的展望の限定」は、ここでの議論に重なってくる。＜非発達型＞は、時代の申し子でもあったのだ。

しかし直ちに、＜非発達型＞の検討からわかったことを付け加えなければならない。

まず、この型は自己意識と就業意識をつなぐ一貫した性格をもっており、就業意識において断片的に見られるものを越えているということだ。本稿からは、自己意識と就業意識を貫く時間的展望の在り方に根拠をもっていることを明らかにした。

次に、札幌の高校生の＜非発達型＞は、今へポジティブに集中していて「時間的展望を限定している」が、同時に社会を悲観し、未来を展望できないことによって、「時間的展望を

限定するしかなかった」とも言える。この＜非発達型＞の担われ方の両義性については、一般的指摘に止まり、十分な検討ができなかった。

そして最後に、＜非発達型＞をストレートに否定的評価することはできないということだ。

何よりも、1990年代から続けられてきた「改革」の成果として、高校生のなかに時代に「適応する」生き方として、＜非発達型＞が生じつつあるのではないかと考えられるからである。

この新しく生まれた生き方に、どのように社会や大人が向かい合ってゆけるのだろうか。さらに考えてみたい。

-
- 1 耳塚寛明「進路選択の構造と変容」（樋口大二郎・耳塚寛明・岩木秀夫・荻谷剛彦編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版 2000，所収）。
 - 2 望月由起『進路形成に対する「在り方生き方指導」の功罪 高校進路指導の社会学』（東信堂，2007）を参照。
 - 3 片瀬一男『夢の行方 高校生の教育・職業アスピレーションの変容』（東北大学出版会，2005），235～236 頁。
 - 4 下村英雄「高校生の進路意識と希望進路の変更」（『進路決定をめぐる高校生の意識と行動—高卒「フリーター」増加の実態と背景』，日本労働研究機構調査研究報告，No 138，2000）がある。
 - 5 現代の若者問題の主要な研究者の一人である浅野智彦は，このような現在の取り上げ方を若者問題の「失われた 10 年」と評価している。浅野智彦編『検証・若者の変貌 失われた 10 年の後に』（勁草書房，2006）によると，以前の取り上げ方は，現在のような否定的な評価もあったが，同時に，肯定的な評価も多かったと言う。例えば，「情報高感度人間（若者）」や「情報機器を使いこなす新人類」を上げることができる。消費の部分での肯定的な評価に偏るが，それでも現在の取り上げ方が，バランスが悪いイメージの方に傾いているのと大きく差がある。浅野智彦「若者論の四〇年」（『中央公論』122（4）（通号 1476），62～65 頁，2007／4）も参照。
 - 6 千石保『新エゴイズムの若者たち』PHP 新書，2001。
 - 7 速水敏彦『他人を見下す若者たち』講談社現代新書，2006。速水敏彦は『他人を見下す若者たち』において，現代の若者の特徴として，「自分に甘く，他人に厳しい」，「努力をせずに成果が欲しい」，「すぐにいらつき，キレル」，「無気力，鬱になりやすい」，「『悪い』と思っても謝らない」等をあげる。そして結論として現代の若者は（自分にはない）「自己肯定感」を手軽に調達するために，他人を見下すことで，「仮想的」に手に入れていると主張している。
 - 8 Giddens, A. (1991), *Modernity and Self-Identity*. Cambridge: Polity = 『モダニティと自己アイデンティティ 後期近代における自己と社会』秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也，ハーベスト社，2005。
 - 9 山田昌弘『希望格差社会』筑摩書房，2004。
 - 10 昔，職業高校と呼ばれていたが，呼び方が変わった。
 - 11 内田樹『下流志向 学ばない子どもたち働かない若者たち』講談社，2007。
 - 12 浅野智彦編，前掲書。
 - 13 下村英雄，前掲著。
 - 14 浅川和幸「進路指導転換期における高校生の職業意識—北海道 S 市を事例に—」『北海道大学大学院教育学研究科紀要』（第 98 号），2006。ここでは因子分析（主成分法，バリマックス回転）で行っている。後に因子分析（主因子法，プロマックス回転）でやり直したが結果は変わらなかった。ただし，この論文では「求道因子」のことを，「貢献琢磨因子」と呼んでいる。ところで下村は，前掲著において，方法は少し異なるが同じ設問の結果を分析している。方法は主成分分析である。第一成分として（因子負荷量の大きな順に），イ，ア，ケからなる「仕事以外にいろいろ経験したい」を抽出している。下村は，この第一成分をフリーターと共通する進路意識として注目しているが，実はそれ以外の成分にも注目する必要がある。第二成分として，カ，ウとマイナス符号のついたキとコからなる「専門知識を磨いて人の役に立ちたい」，第三成分として，オ，エからなる「有名になって高収入を得たい」，そして最後に第四成分として，クからなる「安定した生活を送りたい」を抽出している。高校生は「専門知識を磨いて人の役に立ちたい」とも思っているのである。本稿の分析とは，第一成分が違っているが，共通点の方が多いように思う。第二～四成分は，ほぼ共通している。

- 15 宮台真司『終わりになき日常を生きろ』筑摩書房，1995。
- 16 日本経営者団体連盟『新時代の「日本的経営」～挑戦すべき方向とその具体策』（新・日本的経営システム等研究プロジェクト報告），日本経営者団体連盟，1995。
- 17 内田，前掲著，66 頁。
- 18 内田，同上。
- 19 中西新太郎『若者たちに何が起きているのか』花伝社，2004，も参照した。